## 彷徨へる心のままに 昭 和

应 年

彷<sup>さ</sup>ま 見返りの陵を登ればみかえをかったがのぼ 、 る 心 のままに

斯くあるは人の宿命かが、 簫々の闇にとけゆくしょうしょうしゃみ 野は遙か去に し日の面影の一番が

天地に星の飛ぶなり
あめつち
ほし

光輝なき旧 雪の舞ふ砂丘薄れてゆきょうきょ りし仕種は

忘却の寄する汐音に

叫ぶには余りに深く 消え去りぬ名残の水際はながのなどは には余りに虚した。

燃え狂ふ情熱の焰 若き身の裏に留めて 例か 0 玉散る知性

春るさめ 相覧を の旅 も楡影つたふ しみに頬を濡らせば を逝くなり

陽な 痛ましき魂 初夏の野に陽炎たてば
なっ
の
の
かぎろひ 癒え て幸福は希望は の疵の

三春秋

の絢夢原始林影に

微まかぜ の赤き血潮よ みし白珠の水 に咲き出づる華

友垣の誓ひし言葉ともがきちかしるとほ 月影に宿命解かんとつきかげ さだめと 汐飛沫浴び 秋深き磯に し彼の時とき

寥々かりょうりょう 斯く故に千草ふみしかした。 々の孤杖を運ぶ き

又燃えぬ愛情と決意にまたもののである。 陵を去る遊子の瞳 散り果てて悲哀を秘めつ

ないないないないない の新き たな旅出

に時は流れぬ

藤 池 露弘  $\blacksquare$ 基 君 君 作 作 曲 歌